



「共に」 ～子ども(生徒)に学びながら～

「子どもに学ぶ」とは、教育の世界ではよく耳にする言葉です。道川分教室においても、日々生徒に学んでいることを実感することが多くあります。

ある日の高等部Aさんのことです。登校時から表情がさえず、不安げな声も聞かれません。毎朝のルーティンである整容や音楽鑑賞をしても落ち着きません。様子から、病棟スタッフと相談をして、この日はベッドサイド学習とすることにしました。

自室に戻ってからも不安げな様子は続きましたが、ゆっくりとアロマ体験をしたり、本を読んだり、歌を聴いたりしている中で笑顔が見られ、意欲的に他の活動へも取り組むことができました。

なぜ、朝から不安な様子であったかは分かりませんでした。本分教室の生徒が学習に向かう上で、「心理的な安定」を図ることがどれだけ大切か、ということを変更して教えてもらった気がします。そして、安定を図るためには、快の情動が大切な要素であることにも気付かせてもらいました。

やはり目指すは「笑顔あふれる学校」なのです。

子どもに学び、共に成長し合える学校であり続けたいな、と思います。

「両親の集い」巻頭言 (R4. 10. 25 社会福祉法人全国重症心身障害児(者)を守る会発行 第756号)

共に育つ教育

下山 直人

この子ら(重症児)の教育に当たる者は、たいがい大きな壁にぶつかります。彼らの前では無力な自分を感じるのです。

私は、文部科学省での仕事を通して守る会と出会いましたが、その前に青森県での教員経験があります。そのとき、現在守る会東北ブロック長(青森県支部長)のTさんの娘さんを担任しました。

初めは何をやっても失敗ばかり。そんなとき、お母さんの介助で、校内を満面の笑顔で歩く娘さんの姿を見ました。それは、彼女が自分の持てる力を発揮する喜びでしたし、その思いを汲んでいるお母さんの姿でした。彼女から教えられるしかないのだなと思いました。教える、教えられる関係の逆転であり、共に育つ出発点でした。

それからは、彼女の好きな揺さぶり遊びをあらゆる方向で広げる教育活動を展開しました。彼女には喜びが、私にはやりがいもたされました。教育は「共に育つ」ことを通して実現していくのだと、思い知らされました。

この子らは、もともと輝くものをもつから磨きあげよ、と先人は言いました。その役割は真っ先に学校に求められるものでしょう。 ー後略ー

(元文部科学省特別支援教育調査官、前筑波大学人間系教授・筑波大学附属桐ヶ丘特別支援学校校長、本誌編集企画委員)